

大坂城跡発掘調査（ S03 - 13次）現地説明会資料

平成16年1月23日(金)
大阪市教育委員会
財団法人 大阪市文化財協会

はじめに

大阪市教育委員会と(財)大阪市文化財協会は、平成15年11月から平成16年1月まで大阪府中央区系屋町1丁目・北新町1丁目の地点で、大坂城跡と難波京跡の発掘調査を行ってきました。今回の調査では、古代の方形土壌をはじめとする興味深い遺構が発見されました。

調査成果

今までの調査から、人が住む以前に堆積した地層(地山)の標高を復元すると、調査地の北西には、北東・南西方向にのびる大きな深い谷があったことがわかっています(図1)。

1. 西調査区

本調査地の西調査区には、この谷に向かう小さな谷があり、この谷の中に7世紀半ば～後半の方形土壌2基(図3の方形土壌1・2)が発見されました。これらの土壌からは、前期難波宮が営まれていた時期の良好な土器資料が多数見つかりました。このうち方形土壌2はかなり深く掘られており、井戸の可能性もあります。また、これらの土壌の上には7世紀末～8世紀初頭の土器を含む地層が堆積し、その上面で8世紀前半ごろの後期難波宮の時代に埋められた溝群が見つかりました(図3の溝1～7)。溝はいずれも急な傾斜地に掘られていますが、水が流れた痕跡は見られませんし、谷の方向とは関係なく東西方向に掘られているので、区画溝であった可能性が考えられます。

これらの遺構や遺物は、前期・後期の難波宮の宮域外に造営されたものであり、難波京の建物や道路などの配置や、当時の暮らしを知るうえで、重要な手がかりとなるものです。

この谷は奈良時代の間にはほぼ埋め立てられ、その後、中世には畠地となりました。さらにここでは16世紀末の豊臣時代の整地層も見つかっており、古代から近世にかけて、人の手が加えられ、利用されていた土地であったことがわかりました。

2. 東調査区

東調査区では中世や近世の遺構は見られませんでした。これは地山の標高が現状で西調査区よりも1mほど高く、削る整地が繰り返し行われたためではないかと考えられます。地山の上面では古代の柱列と掘立柱建物が見つかりました(図4)。出土遺物がほとんどないため、これらの遺構の時期はわかりませんが、方向がよく似ているので両者は同じ時期のものと考えられます。

現在までの調査では、前期・後期の難波京についての考古学的資料はまだあまり多くありません。今回の発掘調査は難波京を考える上で、重要な資料となるものです。



図1 調査地周辺図(1:6,000)

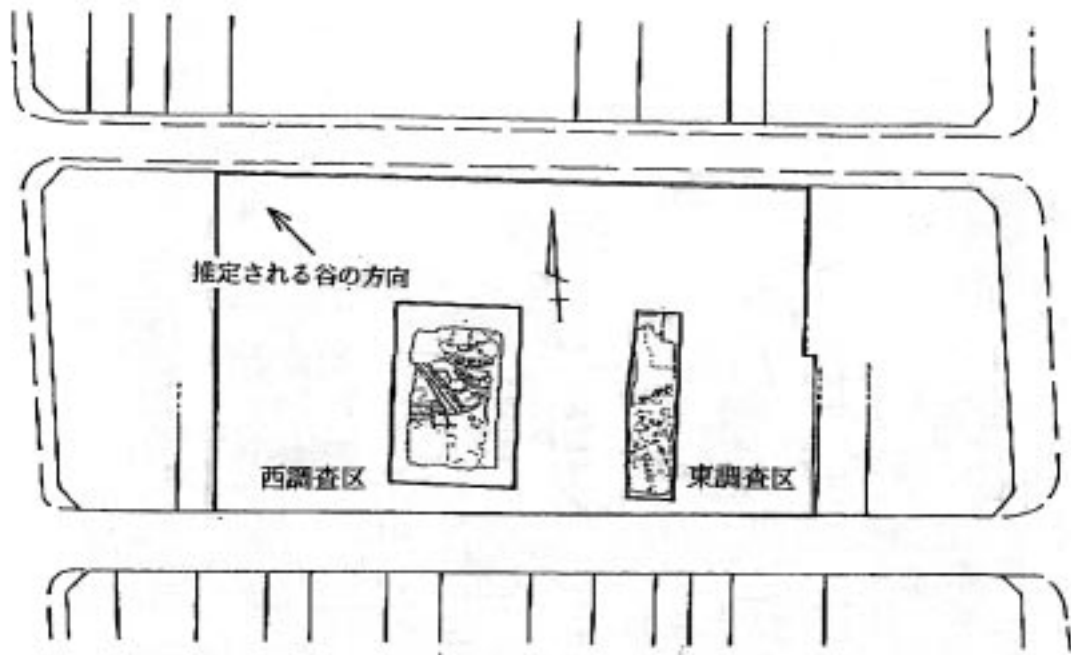


図2 調査地位置図(1:1000)

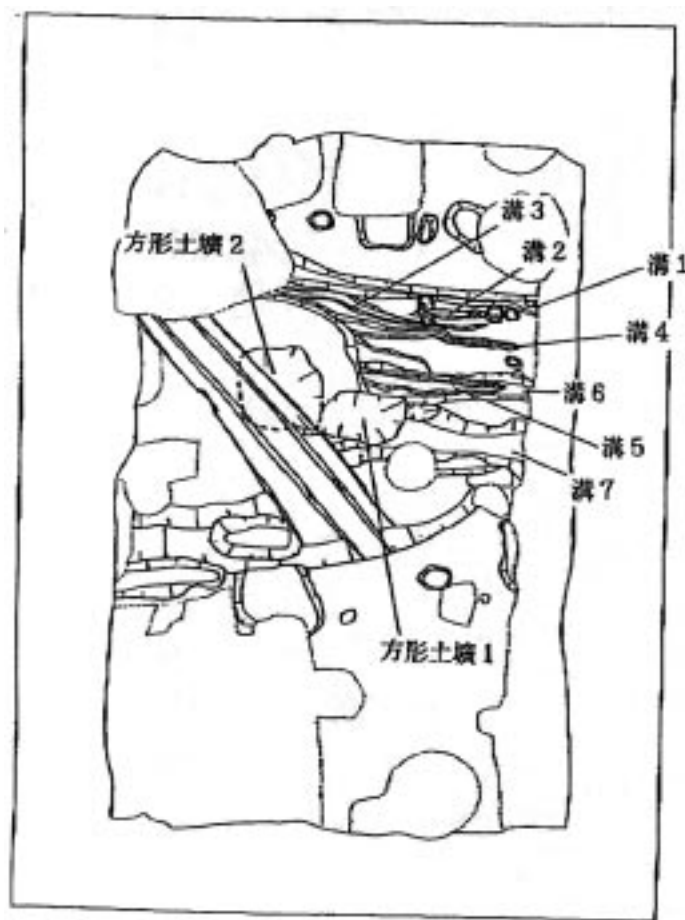
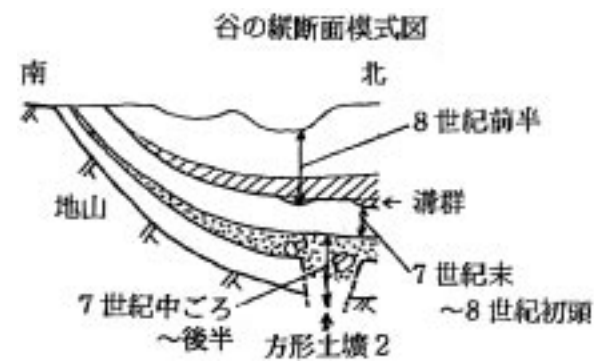


図3 西調査区で見つかった古代の遺構(1:200)



図4 東調査区で見つかった古代の遺構(1:200)

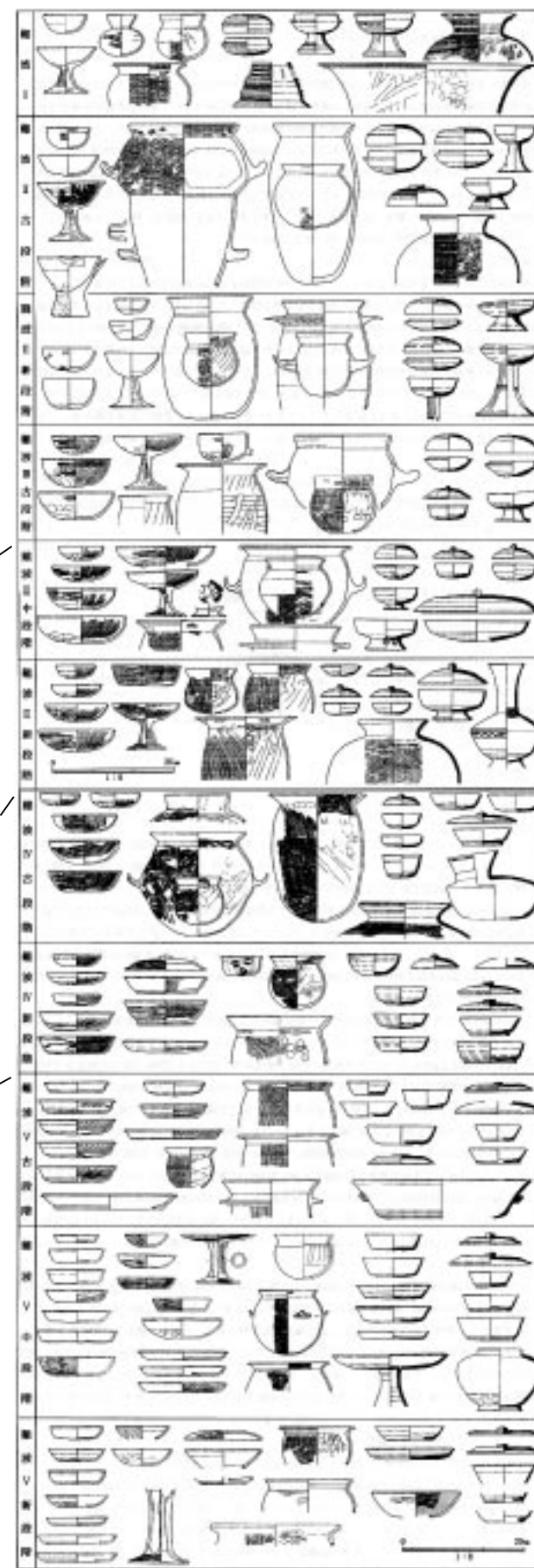


難波宮関係略年表

応神	5世紀(遺構)	難波に行幸(大隈宮)
仁徳		難波に都す(高津宮)
欽明		難波に行幸(祝津宮)
推古	難波宮下層遺跡建物跡	(このころ仏教伝来) 外国使臣を難波に饗する(四天王寺・法隆寺建立)
608	推古16	遣隋使難波より出発
孝徳	645 大化元	(大化改新)都を難波に移す
652	白雉3	難波長柄豊碕宮完成
天智	667 天智6	(大津宮遷都)
弘文	672 弘文元	(壬申の乱)
天武	673 天武元	(飛鳥浄御原宮遷都)
678	6	摂津職の初見
679	7	難波に羅城を築く
684	12	難波に都せんと詔す
686	朱鳥元	大蔵省より出火、宮室全焼
持統	694 持統8	(藤原京遷都)
文武	699 文武3	難波宮に行幸
706	慶雲3	難波に行幸
元明	710 和銅3	(平城京遷都)
元正	717 養老元	難波宮に幸す
聖武	726 神亀3	藤原宇合を知造難波宮事とす
732	天平4	宇合らに物を賜う(工事一段落か)
734	6	難波京の宅地を班給す
744	16	難波宮を皇都と定む
745	17	(平城京遷都)
孝謙	756 天平勝宝8	天皇、難波宮の東南新宮に御す
光仁	771 宝亀2	難波宮に行幸
桓武	784 延暦3	(長岡京遷都)
793	12	この頃難波宮廃止か
794	13	(平安京遷都)

前期難波宮のころの土器

後期難波宮のころの土器



(佐藤2000『難波宮址の研究第11』より引用)

図5 略年表と土器・谷の縦断面模式図